

西洋人が見た AMA —海外文芸における「海女」のすがた—

海女研究会 2012 年 2 月 20 日

松月清郎

はじめに

1950 年代以降に刊行された、海女を主題、もしくは重要な役割として配した外国人の手による作品を選んで紹介する。

1951（昭和 26）年に再開したミキモト真珠島における海女の作業は一般の観光客にとって海女の姿に接する絶好の機会であり、「真珠取りの海女」の姿を広めるのに大きな力を発揮した。とりわけ西洋人にとっては彼らの抱く「真珠取り」の異国情緒につながる大きな要素で、真珠島の海女観覧場は多くの外国人でにぎわった。その一方で本来の漁労者としての姿を求める立場からは、真珠島を含む観光地での海女作業を、実態とはかけ離れたショーとして軽視する動きも見られたようである。

この頃に日本を訪れた外国人が海女に向けたまなざしの一端を、写真集と小説作品の中に見ることで、異なる文化圏の人々に海女の姿はどのような印象を伴って伝えられ、定着したかを考える一助としたい。

素材はいずれも一般向けに公刊されたもので、先行する著名な事例として明治時代の旅行記からリチャード・ゴードン・スミスの日記を選んだ。

Richard Gordon Smith ‘The Japan Diaries of Richard Gordon Smith’ 1986 年

荒俣宏・大橋悦子訳『ゴードン・スミスのニッポン仰天日記』小学館、1993 年

Francis Haar ‘Mermaid of Japan’ 1954 年

Robert Eunson ‘The Pearl King’ 1955 年

Fosco Maraini ‘L’Isola delle pescatrici’ (『漁婦の島』) 1960 年

‘Hekura : The Diving Girl’s Island’ 1962 年

牧野文子訳『海女の島・舳倉島』未来社、1964 年

Ian Fleming ‘You Only Live Twice’ 1964 年

井上一夫訳『007 号は二度死ぬ』早川書房 1964 年

Katherine Govier ‘Three Views of Crystal Water’ 2005 年

1. Richard Gordon Smith ‘The Japan Diaries of Richard Gordon Smith’ 1986 年

荒俣宏・大橋悦子訳『ゴードン・スミスのニッポン仰天日記』小学館、1993 年

・イギリスの豊かな家庭に生まれて莫大な遺産を相続したゴードン・スミスは 1898 年（明治 31 年）冬に日本に初上陸。その後数回にわたって来日し、各地を旅した。好事家であった彼は大英博物館のために東洋の珍しい動物の標本を集める仕事をした。自然に深い関心を寄せたナチュラルリストのひとり。

- ・1904年(明治38年)10月7日、鳥羽から小舟で海に出てトシ(答志島)とカシマ(菅島)に渡っている。

- ・海女は海藻を採取する幼い少女の頃から競争意識があり、成長してアワビを取るようになると、その稼ぎは家族を養うことになるので彼女たちが誇り高いのも当然。

- ・海女の眼鏡、手袋、ナイフ、籠などについて言及。答志島の沖合で海女船に同乗した彼は62歳の海女の潜水時間が58秒であること、二時間の作業の間にタコ、イガイ、アワビ、クロダイ、イセエビなどが大量に取れたこと、二十人いる海女のうち若い海女は五人だけで、海女の髪は赤茶け、皮膚は荒れていることなどを記録。

- ・住民を撮影するのに、持参の蓄音機で愉快的音楽と勇ましい音楽の二種類を聞かせてその反応の違いを写し取っている。

- ・「実際、私はここにいる島の人々ほど好きになった日本人はいない。そんな気持ちですぐにわいてきた」といい、海女を含む島の漁民は度胸があり、たくましく親切で勇敢、と彼らの性格を高く評価。

- ・宣教師が「粗暴で未開の、非キリスト教徒である黄色の野蛮人」という人々のすばらしい礼儀と最高の親切が忘れられない、と結んでいる。こうした日本人の美德についての礼賛は同時代の外国人旅行者の記録に共通のものだが、その背後に「未開人」に対する優越の意識は感じられず、ゴードン・スミスが離島での一日を心底から楽しんだ様子が窺える。

2. Francis Haar ‘Mermaid of Japan’ 1954年

- ・フランシス・ハールは1908年生まれハンガリーの写真家。40年から42年の間、銀座に写真スタジオを開き、戦後も1946年から56年まで日本で活動した。

- ・‘Mermaid of Japan’は1954年に東京の要書房(文京区曙町)から出版された写真集で、全部で71景の写真で構成。御木本真珠島で撮影されたと思われる写真が数点含まれる他に、海女小屋の俯瞰、天草干しの様子、サザエ漁、食事風景など。ぜんたいに脈絡の感じられない構成。

- ・序文(Holloway Brown)で、女性を「弱い性」とみるのは西洋の考え方で、日本の海女は生活力に溢れるたくましい存在だとし、その肉体的特徴に言及する。

- ・日本を訪れる多くの外国人旅行者が見る機会のある海女の潜りは「タイムズスクエア劇場で公演されるバリ島のダンスのようなもの」

- ・真珠島の海女作業は真珠貝を採取する本物(Genuine)の海女で、興行的に大きな成功を収め、海女の姿は富士山と同じくらいに外国人の被写体となっていると評価。

- ・知られざる海女の里として石鏡訪問。海女の衣装、海女小屋、潜水の深さと獲物、道具などについて紹介。行商の来ることや海女たちが町へ用事を兼ねて遊びに行くこと、4月に行われる「タケノミネ」の女神を祭る行事などについて。

- ・石鏡の未婚海女が伊豆初島へ天草取りの出稼ぎにゆくこと、秋の求婚時期(?)には

男性が相手の家に試験的に住む形態を取ることを紹介。

- ・日本情緒のひとつとして選ばれ、絵葉書などと共に外国人向けのみやげ物店で販売されたものではないか。土産として持ち帰られたこのような印刷物は、その国において海女のイメージ形成に一定の役割を果たしたものと思われる。

3. Robert Eunson ‘The Pearl King’ 1955 年

- ・ロバート・オンソンは AP 通信東京支局長。
- ・御木本真珠養殖場で働いていた、北村おろくという 60 を過ぎた現役の海女へのインタビューから始まる短い章で、幸吉の海女に対する思いやり、赤潮対策として海女が活躍したこと、海女修業の開始年齢、道具と衣裳、カチドとフナドなど漁業者としての海女と、真珠養殖場での仕事について。
- ・養殖場の仕事は夏 2 時間、冬は 15 分と定められていること、未婚の海女は結婚願望が強く、気まぐれで仕事に集中できず、25 歳から 40 歳の既婚海女がよく働く。

4. Fosco Maraini ‘Hekura : The Diving Girl’s Island’ 1962 年

牧野文子訳『海女の島・舳倉島』未来社、1964 年

- ・フォスコ・マライーニはイタリア・フィレンツェ生まれ（1912 年～2004 年）の文化人類学者。原著のイタリア語版は 1960 年に出版され、その後英語、日本語に翻訳された。外国人による海女について書かれた本としては最も知られた一冊。

- ・日本語版序文にマライーニの著述意図。当初の海女に対する興味は肉感的魅力から始まったが、現地での滞在を続けるうちに「詩的な生活に対する愛着」へ変化。以下、西洋における裸体と性欲についての考察を披露。外国人が海女に関心を示すとき、「裸であること」がどれほど大きな要因となっているかについて率直に告白。

- ・「本物の海女」を探す過程で御木本真珠島も槍玉に。鳥羽の海女は「海の神さまの話とはなんの関連もないもの」で、「二、三人の海女たちは、まったく観光客のためにだけ働いているのであって、案内係り嬢が訪問客を船に乗せて潜水するところへ案内した。そしてそこで（中略）白シャツとパンツに身を包んだ女たちが海水に潜っている間、彼女はわれわれに変な英語で習い覚えた子守唄を歌いなぞして、養殖真珠の特殊技術を説明してくれたのである」（牧野文子訳 38 頁）。

- ・英語版では案内係は he で表され、衣装は白シャツとパンツとも書いてなく、該当する箇所 ‘he explained to us the technical details of pearl culture, reeling off a patter in grotesque English which he had learnt by heart’ は「彼は丸暗記した奇妙な英語で立て板に水とばかりに真珠養殖の技法を説明した」とでも訳すべきか。

- ・彼のチームは美しい海女二人と腕利きの海女二人と契約を交わし、実際のアワビ漁の様子を二週間にわたり撮影。マライーニは「海女と一緒に働くのは楽しみであった。こんなに従順な娘たちを私はこれまで見たことがない位で、いつも機嫌よくあっちこっちへ跳

ね回り、必要となると何時間でも水にはいって気にはしないのであった。だが、惜しいことに、あまりものを考えるという習慣は身につけていない」ので、何度もやり直しをして撮影することになったという。撮影に演出は付き物だが、かなりの頻度で要求したことを思わせる。映画撮影のいわば副産物。本来は映像を見るべきだろうが、その手立てががないのは残念。

5. Ian Fleming ‘You Only Live Twice’1964 年

井上一夫訳『007 号は二度死ぬ』早川書房 1964 年

・作者のイアン・フレミング（1902 年～1964 年）は英国生まれの冒険小説家。本作は英国秘密諜報部員 007 号ジェイムズ・ボンドが活躍するシリーズの第 12 作目。

・上司 M の秘密指令を受けて日本に降り立ったボンドが日本の秘密情報機関の長官であるタイガー田中と協力して作戦を展開する。実際の行動は、九州にある、毒草ばかりを集めた怪しい植物園「死の城」に潜入して、そこを運営している博士（実はボンドの宿敵プロフェルド）の真の目的を探り、阻止すること。

・タイガーが同行して福岡まで行くのにわざわざ日本の教育と称して迂回路を取り、蒲郡から水中翼船で鳥羽へ渡る。旅館から「向こうの防波堤と山高帽子にモーニング姿で陰気に海を見渡している銅像」を見、和田金牧場、伊賀上野を経て京都に入り、船で九州入りする。

・城に潜入するのに沖の黒島から泳ぐ作戦。黒島は海女の島で、ボンドはある一家の世話になる。その家の一人娘がキッシー鈴木という 23 歳の「グレタ・ガルボに似た」海女で、17 歳のときにハリウッドに映画をとりに行つて有名になったが、もとの生活に戻りたくて島に帰ってきたという設定。

・ボンドはキッシーとアワビ漁に出て、キッシーが 55 個、ボンドも 10 個を取る大漁だった。海に潜って作業する様子は次のようなもの。「あたしたちは、潜りの場所を選ぶのは早い者勝ちってことになっているのよ。今日うちの舟がいちばんみんなの知っている穴場まで行かれるし、そこを占領できるわ。そこは岩に生えた海藻がよくしげっていて、あわびはその海藻を食べるのよ。深くて 40 フィートくらいだけど、あたしは一分近く潜っていられるから見つけたりさえすればあわびをふたつか三つはとれるわよ」（146 頁）。

・水中眼鏡を示して「この両側のバルブを眼鏡と目の間の気圧を水と同じにするために締めなきゃならない」と説明。ボンドは「余生をこうやって昼間は水平線まで彼女を乗せた小舟を漕ぎ、たそがれに小さくて清潔な家に彼女と一緒に帰るとい生活」を想像。海女の村での生活に対するフレミングの好意が読み取れる。

・ボンドは島にきた真の目的を告げ、夜陰に乗じて海へ出、城を目指す。潜入するボンドの活躍談の印象は江戸川乱歩の小説を思わせ、パノラマ島にでも潜入したのかと思うような場面が続く。ボンドはプロフェルドを仕留めるが自分も怪我をして海中に転落、頭部を強打し記憶を失う。キッシーの懸命の介抱で回復、新聞記事のウラジオストックという

言葉に反応して、島を後にする場面で小説は終わる。やさしく、美しく、生活力のある海女キッシー鈴木の原型を作者フレミングはどこで入手したのか。

・同名の映画はショーン・コネリー主演で、1967年に封切られた。海女の登場する部分はおくわずかで、浜美枝扮する海女のキッシー鈴木は白いビキニ姿で行動する。

6. Katherine Govier ‘Three Views of Crystal Water’ 2005年

・キャサリン・ゴヴィアはカナダ人の女性作家。本作はヴェラというヒロインの13歳（1934年）から30歳（1950年）までの半生を描いた小説。カナダのバンクーバーに始まり、横浜、鳥羽、架空の夏島、神戸、広島、そして天草で終わる。その間に彼女の祖父、祖母、母、父親の生きた19世紀のセイロン、パナマ、クウェート、パリ、シカゴでの出来事が交錯する構成。

・彼女を取り巻く人物として海女のケイコ、刀磨ぎのイッカシ、同年代の海女ハナコ、ハナコの母親マイコ、それにタミオ、テルといった若者たち、実在の人物として御木本幸吉も登場。

・外国人の手による、海女をヒロインにした異色小説。邦訳は未完。原書は **Fourth Estate** 社刊。

・1934年、バンクーバー。ヴェラ（13歳）は英国人の祖父ジェームズ・ロウインガーを港に迎え、一緒に到着したケイコと三人で暮らし始める。母親はすでに亡くなり、父親は海外で音信不通。ジェームズは真珠商人で、ロウインガー・マクビーン商会には女性事務員ひとりがいる。ヴェラは学校の帰りに祖父の店に寄って、彼が若いころセイロンや中東世界を巡って体験した話を聞く。

・あるとき、店で浮世絵版画を見る。三枚が一组の版画は「透明な水の三景」という（どうも落ち着きの悪い訳だが）表題。一枚が海女の潜水と焚き火を囲んでの集いの情景、二枚目は夜陰に隠れての侍と女性との手紙のやり取り、そして最後は雪景色の中、炎上する塔から脱出する二人の女性の図。真珠の取引で日本を訪れる機会があった祖父ジェームズが集めた浮世絵にヴェラは彼の海女に対する深い愛情の表れを見る。作者は歌麿の浮世絵に描かれた海女の姿を「激しい労働を描いたにも関わらず幻想的で、何世紀にも渡って日本の人々を魅了してきた」と見て、それは西洋の人々にとっても同様と述べている。

・祖父の死。残されたヴェラはケイコと日本に渡ることを決意。1936年（昭和11年）2月、横浜に到着し、海女のケイコの親戚を頼って鳥羽へ。春になると三百人ほどの漁民は全員で志摩の南にある夏島に移住して漁期を過ごす。この架空の島である夏島の地理的設定に違和感（本土と島の距離は12マイル：約20キロ、船で6時間を要する）。ケイコは海女の仲間たちと一緒に働き始める。

・周りになじめないヴェラはひとりで島を探検。ある日、刀剣の研磨師であるイッカシと会う。彼は京都の名家に生まれ、高等教育を受けて外交官となり、英国で大使館に勤務したが、今ではこの孤島で刀を磨ぐ生活。軍の特務機関にいる旧友大島と連絡を取り合

ってもいる。英語が話せるイッカシはヴェラに剣術の型を教え、ふたりは親しみを感じるようになる。ヴェラはイッカシが日本の戦争に否定的なこと、身の危険を避けるため、夏島にいることを知る。

・海を恐れていたヴェラはここで生きてゆくため海女になることを決意。同年代のハナコから海女になるための指導を受ける。海に入り、貝を拾い、名前を覚える。一週間後、ハナコはヴェラに眼鏡を手渡し、胸の深さまで入って息継ぎを練習し、浅瀬で何がいるかを探させる。なんとか海女の仲間に加わろうと、ハナコの協力を得ながら月夜の海で練習するヴェラ。

・夏が過ぎて漁の季節が終わると海女たちは鳥羽で冬を過ごす。手紙の配達をする籠屋のタケ老人は御木本が真珠の養殖を始める頃に貝を入れる竹籠を作ってやったことが機縁で、今でも養殖場に出入りしている。冬の耐乏生活の間、ヴェラは御木本の真珠養殖場で仕事をしたいと願うが、それは果たせない。

・次の春が巡って海女たちはまた夏島に移る。ハナコにはすでにテルという相手がいたが、ヴェラにもタミオという青年が現れる。タミオはケイコの甥で精悍な表情の、無口な若者。二度目の夏、ヴェラはさらに練習を積んで海女として認めてもらおうと努力する。ヴェラが海女となって初めて海に入る様子は次のように描写される。「足を水につけると皮膚が縮みあがり、うなじの髪が逆立つのを感じて思わず足を引っ込めた。風は沖から彼女に向かって吹く。寒さで手足に鳥肌がたった。それでも潜るのには上々の日らしく、水際で待機する海女たちはそわそわしている。最古参の海女が、潜るのは今から一時間、休憩を取ってからもう一時間、と取り決める。ヴェラは恐る恐る片足ずつ海水に浸し、前かがみになって腕と胸に手で飛沫をかけた。頭に眼鏡を付け、腰のタガネの位置を確かめる。そして練習してきた通り、つま先を伸ばして飛び込もうとした。」

・「潜るところは数ヤードの深さだった。そこでわかめを採取する。ヴェラは潜り始めた。潜るたびに早くなり、長く海底にいられるようになった。ヴェラはマイコの方を見て、素早く潜り、獲物を見つけて刈り取る方法を学ぼうとした。だが、マイコもセツも教えようとはせず」、ヴェラが自分でその方法を会得すると、ようやく仲間として扱ってくれる。

・肌の色の異なる外国人を抵抗なく受け入れる海女たちの社会にあって、逞しい青年タミオとヴェラの恋愛が展開する。このあたりは『潮騒』の初江と新治のそれを思わせる。

・三度目の冬を鳥羽で過ごすヴェラは、御木本幸吉に会って養殖場で仕事がしたいと申し出る。ヴェラの祖父と知己であった幸吉は真珠島の博物館で外国人の案内をする仕事をヴェラに与える。

・ヴェラの祖父ジェームズと祖母のソフィア、それに御木本幸吉との出会い。真珠商人ジェームズは取引を続けて世界を巡る間に横浜で真珠養殖を模索中の御木本に会ったことがあり、その際、科学者の知恵を受けるように助言をした。後に成功した幸吉はそれを恩義に感じていて彼を鳥羽に招待する。祖母となるソフィアはジェームズの父親の知己マクベーン氏の娘で、同年代の二人はこれまでセイロン、パナマ、クウェートで会う機会があ

ない。ヴェラは一瞬、恐怖を感じたが、救助に潜った。最初るときよりも早く降りられるように祈りながら鍾につかまって、ハナコのロープに沿って下っていった。海藻の茂みをぬけて迷路のような岩陰に入り砂地の底に降り立つと、暗闇の岩陰の間に立ったままのハナコを見つけた。」遭難に気付いた時の恐れ、状況の把握、海女たちの対応、救助の方法そしてハナコの葬儀の様子など、臨場感をもって描写される。

・1939年9月4日、イギリスのドイツ宣戦布告。その日の定期船でヴェラの父親、ハミルトン・ドリューが到着する。ドリューは戦争開始の瀬戸際でカナダに連れて帰ろうとするがヴェラは応じない。だがケイコの説得を受けて、帰国を決意する。タミオはそれを知って動揺する。

・続くお盆の行事（なぜか秋になってから）。男たちは神輿を担ぎ、氣勢を上げる。その中にタミオもいた。ヴェラと別れなくてはならないタミオは酒に酔って自暴自棄になる。祭りの翌朝、魚網がずたずたに切られているのがわかり、島中大騒ぎになる。結局、タミオが犯人として捕らえられ、小舟に乗せられて島から追放される。

・イッカンシのところへは籠屋の老人が旧友大島の指令をもたらす。彼の研いだ名刀は日独友好のしるしとして贈られることに。父親と横浜から帰国する客船の中でヴェラは日本人がヒトラーに日本刀を手渡している写真記事を眼にする。その刀にヴェラは思い当たり、今までイッカンシに抱いていた信頼と好意が一気に暗転するのを覚えた。帰国後の空白。カナダの家も自分の家ではないという焦燥がヴェラを苦しめる。やがて日本人街で木刀を手に入れ、稽古を始める。

・以下、御木本の養殖真珠登場によるパリの真珠商人の反応と同じ時代のロウインガー・マクビー商会でのジェイムズとソフィア、それに彼らの娘、つまり、ヴェラの母親ベルに接近するハミルトン・ドリューとの確執について。ジェイムズとソフィアは結婚式のプレゼントに彼らにとっては宝物に等しい真珠（クウェート海中の真水域から採取された淡水真珠）を用意した。ところがドリューはそれを指示の通りに使わず模造真珠で誤魔化そうとしたので、ソフィアは許さず、絶縁する。結婚したドリューとベルは新天地を求めてバンクーバーに移り、ロウインガー・マクビー商会の支店を開設した。

・カナダに戻ったドリューは真珠見本市に出店。ヴェラはシカゴ・サンズの記者カルダーと再会。ドリューは御木本養殖場に真珠の核を納入するため、アーカンソーの川で淡水貝の採取事業を開始、川底の様子を見るのにヴェラの潜りは役に立った。が、父親の態度に反感を覚えたヴェラはひとりバンクーバーに戻る。ヴェラの日本での生活に興味を抱いたカルダーは彼女を特集した記事を書いて注目を集め、それが縁となってヴェラはカルダーと結婚。安定した生活を営むが、カルダーは飲酒の癖があつて、それがもとで心臓病のため45歳で亡くなる。彼女はまたひとりになる。

・ある日、昔の知り合いから渡された住所を尋ねるとそこには商会の女性事務員がおり、ヴェラの祖母についての話を聞く。ヴェラは祖父の遺言状を手渡され、「透明な水辺の三景」が遺産として残されたことを知る。

・軍の命令によって精魂傾けて磨いだ名刀を差し出したイッカンシは戦争中、失意の日々を送るが、やがて戦争の終結とともに夏島を離れる。ケイコと共に広島から天草に移り、ここで英語を教えることになる。戦後、1950年。再び、日本を訪れるヴェラ。鳥羽でハナの母親マイコと再会し、海女小屋でかつてのような海女たちの会話に接して元気を取り戻す。ヴェラはイッカンシやケイコ、それにタミオの消息を聞きだし、現地に向かう。しかしすでに彼らはおらず、天草で英語教師として活躍していることを知り、長崎へ行く。イッカンシたちが住む天草は夏島に似た景色だった。そこでヴェラは漁師として生活しているタミオと再会、陶芸家となったケイコ、イッカンシたちと会いにゆく場面で幕となる。

・御木本真珠養殖場の海女を天然真珠採取時代から続くダイバーの歴史に加えたことで、彼女たちの存在意義を確定させた点を評価。天然真珠採取時代についても相当のページをさいており興味深く詠ませる。著者は2004年に真珠島を取材で訪れており、その縁で著書の寄贈を受けた。本の表題から海女を連想することは難しく、贈られなければ知ることはなかった作品といえる。

おわりに

指し示す側と受け取る側の思惑の相違はつねにあるもので、異文化間での海女に対する見方はその顕著な事例のひとつかも知れない。昔、当社の優秀な若い女性ガイドが外国のジャーナリストに海女作業の説明をしていたところ、相手から受けた質問が「それで、あなたは休みの日に海に潜るのか」というものだったという。この地方の女性はすべて海女である、という思い込みが相手にあったのか、それともジョークだったのか。

誤解に至らないために、的確な情報の提供とその反応の調査はつねに怠ってはならない。日本の海女に関する正確な知識を海外に向けて継続的に普及する作業は、世界的な認知を得る際に必須の事柄であるように思える。

日常、外国人に接する仕事柄、広く潜水漁民という範疇で海女を捉え、その特殊と一般を考えることの必要性を痛感する。